

キャンプに参加した子どもの自己制御機能と自己実現の変容に関する研究  
木村 朋貴 (生涯スポーツ学科 野外スポーツコース)

指導教員 林 綾子

キーワード：キャンプ 自己制御機能（自己主張性・自己抑制性） 自己実現

1. 序論

今日、社会情勢の急激な変化に伴い、著しい環境の変化がみられ、そのような中において、自分らしい生き方の基本の1つに自己実現があると考える。教育の現場では、自己実現の欲求は、環境との関わりを通して育まれていくと考えられ、仲間との相互作用の中に自己実現への鍵があると考えられ、仲間との様々な葛藤の中で、自分の考えや思いを押し通したり（自己主張性）、我慢すること（自己抑制性）を覚えていく。このように自己を調節する機能は、自己制御機能と呼ばれる。

筆者は野外スポーツコースを専攻しており、キャンプ体験による、参加者の自己表現力の向上や、自己の成長を感じることができ、キャンプ体験により、自己制御機能と自己実現ともに効果があると考えた。

そこで本研究では、キャンプに参加した子どもの自己制御機能と自己実現の変容を明らかにするとともに、自己制御機能（自己主張性・自己抑制性）と自己実現との関連を明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

【対象者】平成23年8月7日から8月9日の2泊3日の「2011年サマーキャンプ 集まれ！！友達いっぱい！！」に参加した、Oスポーツアカデミー所属の小・中学生、計10名を対象とした。

【調査方法】参加者の自己制御機能・自己実現を測定するため、樟本ら(2003)が作成した「自己制御機能」の2因子（自己主張性・自己抑制性）12項目を子ども達に、子ども達についての「自己実現」15項目を指導教員に、キャンプ前（Pre）・キャンプ直後（Post1）・キャンプ1ヶ月後（Post2）に回答してもらった。

3. 結果と考察

1) キャンプ体験を行った被験者の、調査時期ごとの自己制御機能の平均値・標準偏差を算出するため Wilcoxon の符号付き順位検定で分析した結果、キャンプ前とキャンプ直後で有意に向上した結果が得られ、キャンプ直後からキャンプ1ヶ月後においても有意に向上した。因子別では、自己主張性において、すべての調査時期で有意に向上したが、自己制御機能は有意に向上しなかった。この結果から自己制御機能の向上に影響を与えた要因は、自己主張性の側面であると考える。

表1. 自己制御機能の平均値・標準偏差

N	Pre Post1 Post2			X <sup>2</sup>	
	M(SD)				
自己制御機能	10	57.80(6.08)	59.40(6.05)	61.70(6.07)	17.211 (**)
自己主張	10	32.90(5.62)	34.30(5.71)	35.90(5.56)	11.706 (*)
自己抑制	10	24.90(3.31)	25.10(2.47)	25.80(2.70)	4.467 (n.s.)

\*p<.05, \*\*p<.01

自己制御機能の向上の一つの要因として、仲間と協力し課題をクリアする中で、自らの考えを発言し、協力し合いながら取り組むプログラムがあったことだと考えられる。また、キャ

ンプ1ヶ月後に向け向上した理由として、キャンプ中に自己主張することが身に付いた、もしくは自己主張の重要性に気づくことができた者が、キャンプ体験後も自己を表現することができ、自己主張性をさらに向上させることができたのだと考える。自己抑制性の得点は、個人によって得点のばらつきがあり、全体の平均得点には有意な向上がみられなかったのだと考える。

2) キャンプ体験を行った被験者の、調査時期ごとの自己実現の平均値・標準偏差を算出するために Wilcoxon の符号付き順位検定で分析した結果、キャンプ前とキャンプ直後で有意に向上した結果が得られ、キャンプ直後からキャンプ1ヶ月後においても有意に向上した。

表2. 自己実現の平均値・標準偏差

N	Pre Post1 Post2			X <sup>2</sup>	
	M(SD)				
自己実現	10	49.70(6.20)	50.80(6.01)	54.00(6.46)	16.595 (**)

\*\*p<.01

キャンプ体験により、自己実現が向上した一つの要因として、目標や意図がはっきりしているプログラムをこなしていくことで、その目標のために何をしないといけないのかを考え、行動したため、自己実現得点が向上したのだと考える。また、キャンプ直後からキャンプ1ヶ月後に有意に向上した一つの要因として、多くの参加者が所属する新体操の発表会や大会があったため、新体操への取り組み方やモチベーションなどが自己実現へ影響を及ぼしたのかもしれない。

3) 自己制御機能（自己主張性・自己抑制性）と自己実現の相関結果から、キャンプ1ヶ月後の自己主張性とキャンプ1ヶ月後の自己実現の間( $r=7.08$ ,  $p<.05$ )にのみ有意な正の相関がみられた。このことから、自己主張性が高い被験者は、自己実現も高いということが明らかとなった。

4. 結論

非日常的なキャンプの体験は、自分を主張・抑制することのきっかけとなったことがわかった。そして、明確な目的や意図を達成するため、自分の考えを主張したり、相手の意見を尊重しながら仲間と問題解決する体験が、自己制御機能の向上には有効的であることが明らかとなった。また、目標に向かって自分なりに試行錯誤し、取り組むことで、自己実現への効果も期待することができた。キャンプに限らずこのような機会を子どもの教育機会として取り入れることは、子どもの自己主張性の向上や自己実現の向上に有効的であると言える。

引用文献

1. 樟本千里・伊東順子・山崎晃 (2003) 「幼児・児童の自己制御機能と自己実現との関連」, 広島大学大学院教育学研究科紀要第3部第52号: pp. 363-369.